

<ポスト 68 年>の狂気と哲学

石原孝二『精神障害を哲学する』と小泉義之『あたらしい狂気の歴史』は、いずれも「哲学」の立場から、<ポスト 68 年>の精神医学・医療に焦点を合わせながら、きわめて対照的なアプローチを見せる書物です。ここで<ポスト 68 年>の精神医学・医療の特徴としては、「脱病院化」と「地域医療」へのシフト、脳神経科学に依拠する「薬物療法」の一般化、種々の「心の病」の軽症化と「スペクトラム化」、それに伴う「メンタルヘルス・ケア」の一般化等々を挙げておきます。

石原著は、比較的最近の概念である「精神障害」を対象に、WWII 戦後、合衆国で改訂が続けられてきた DSM の分類体系を比較検討し、その理論的な枠組みと争点の変遷を明らかにしています。ただし石原著の特色は、この科学史・科学哲学的（「準-超越論的」）検討に加えて、近年の地域精神医療の諸潮流を肯定的に描き出す点にあります。では石原著のなかで、DSM の分類と地域精神医療の勃興、両者の分岐はどのように分節されているのか。とりわけ、そこで一方では周縁化され、他方では重視される「精神障害」の「社会的次元」をいかに評価すべきなのか。そして地域精神医療の諸相について、この本はいかなる意味で「哲学」しているのか—石原さんには、これらの点についてお尋ねしたいと思います。

一方、小泉著の核心にあるのは、<68 年>当時の「反精神医学」の諸潮流は、結局のところ、地域精神医療やメンタルヘルス・ケアといった新たなかたちで精神医学の拡大をもたらし、医師と患者のあいだの権力関係や、精神医療の治安的・公衆衛生的・統治的機能を市民社会一般に拡張・拡散させただけではなかったか、という強い疑義です。理性と狂気の「分割」以上に、狂気の社会的「包摂」にこそ問題を見出した 70 年代フーコーと相即する主張でしょう。現今の精神医学・医療にかかわる支配的言説への徹底懐疑において、小泉著は一個のイデオロギー批判の書です。ただし、それはマルクス主義においてそうであったように、もはやなんらかの「科学」の立場に依拠するのではない。実際、この本では、最終的に、「精神の狂気」ならぬ「行動の狂気」が、全面化した狂気の社会的包摂の外の形象として呼び出され、この著の批判に最終的な拠り所を提供しています。しかし、フーコーによれば、この「行動の狂気」さえ、統治の観点からは統計学的に処理される「アクシデント」に過ぎなくなるというのが、「生政治」の境位ではなかったでしょうか。

この「行動の狂気」の延長線上に、最近の小泉さんがドゥルーズやフーコーに即して語る「霊性」論を位置づけることもできると思います。私には、小泉さんの霊性論は内なる信念と絶対的な超越性とを直結させ、そこに（イデオロギー）批判の最後の拠り所を見出そうとする議論と見えます。それはたしかに狂気じみた身振りではあるでしょう。しかしそれがどこまで「哲学」でありうるのか、あるいはそれが「哲学」である必要があるのか—この問いを、素朴な一啓蒙主義者からの小泉さんへの質問として提出したいと思います。